

それは、あくまで不埒ふらちな蜜戯みつぎにて

目次

プロローグ	5
第一章 それは、あくまでブラックで	15
第二章 それは、あくまで不可抗力で	43
第三章 それは、あくまで恋心で	82
第四章 それは、あくまで愛の儀式で	129
第五章 それは、あくまで謀 ^は られて	153
第六章 それは、あくまで想定外で	189
第七章 それは、あくまで不埒 ^{ふち} な蜜戯 ^{みつぎ} にて	237
エピローグ	284

プロローグ

梅雨特有の湿った匂いが、閉めきった部屋に充滿していた。

大きな窓を叩く、横殴りの雨。太陽を呑み込んだ鈍色の雲が広がる空に、雷が光っている。

帰宅を促す校内放送がかかる中、放課後の生徒会室で、ひとりの女生徒が半袖の腕をさすっていた。膝下丈のスカートを穿いて黒縁眼鏡をかけた地味な少女は、設楽一楓、十八歳。昨日誕生日を迎えたばかりの高校三年生である。

彼女が生徒会室でひとを待つこと、十五分――

「ごめん、委員長。遅くなった」

現れたのは、見目麗しい……学園の王子様と称される栗毛色のストレートヘアの少年。彼は今期の生徒会長、瀬名伊吹だ。

顔立ちだけでなく声音まで甘く艶やかで、先月十八歳になったばかりとは思えないほど、妖しげな色香が漂っている。彼にはいつも女子が群がっており、遊び人だという噂もある。

ちなみに、彼が委員長と呼んだのは、一楓のことだ。一楓は瀬名と同じクラスで、学級委員長を務めているため、クラスメートのほとんどからそう呼ばれていた。もはやあだ名のようなもの

ある。

「話ってなに？」

いつも気怠^{けだる}そうな瀬名にしては珍しく、頬が紅潮し、息を弾ませている。

一楓は彼がひとりであることを確認すると、部屋の扉に鍵をかけた。そして泣きそうになりながら、瀬名に詰め寄る。

「ねえ、瀬名、見た？ わたしがなんの本を読んでいたのか」

一楓は今日の六時間目の直前、彼の前で、濃厚な濡れ場があるボーイズ・ラブ——いわゆるBLマンガを落としてしまった。周りには隠しているが、一楓はBLをこよなく愛する腐女子^{ふじよし}なのだ。

瀬名がマンガを拾って渡してくれた直後に授業がはじまったため、確認も口止めもできなかった。そのため一楓は、授業中にメモを投げて、彼を生徒会室に呼び出したのだ。

「マンガ？ ちらっとだけど、見たよ。すごいね、あのマンガ。BL……だっけ」

一楓はくらりとする頭を押さえて、悲鳴のような声で言った。

「お願いだから、有島^{ありしま}くんと言わないで！ あ、他のひとにも、誰にも言わないでほしいんだけど！ 瀬名は副会長の有島^{ありしま}くんと、仲いいでしょう？」

有島は一楓にとつて『推し』だ。いわゆる一推しの男子で、彼でBL的な妄想をすることももある。そんな相手に一楓が腐女子だとバレて、白い目を向けられるのは避けたい。

一楓が頼むと、瀬名は不機嫌そうに眉根を寄せる。

「ね、お願い。なんでもするから！」

一楓は両手を合わせ、頭を下げて頼み込む。しかし彼女が必死になればなるほど、瀬名の雰囲気は重く暗いものになる。

彼がため息をついた瞬間、窓の外で稲妻が光った。

「きやっ」

直後に轟^{とどろ}いた雷鳴に、一楓は小さな悲鳴を上げて、その場に蹲^{うつすく}る。

瀬名は彼女の横に座り込むと、優しく微笑んだ。

「僕^{ぼく}いつも学年トップを競っている品行方正な委員長が、あんないやらしい本を読んでいるなんて、びっくりだよ」

甘く柔らかな声に含まれた棘^{とげ}。

一楓の胸の中で、雷に対する恐怖よりも、羞恥^{しゆうぢ}が勝る。

「有島にばれたら、気持ち悪いと軽蔑^{けいべつ}されるだろうね」

「……っ」

「有島だけじゃない。みんなにばれたら、委員長はどうなるんだろう。先生に知られたりしたら、内申点に響いて、大学の推薦をもらえないかもしれないね」

瀬名は笑っているのに、なぜか怒りにも似た圧力を放っている。彼は手を伸ばすと、一楓の長い三つ編みを弄^{もよぼ}びはじめた。

「わ、わたしを……どうする気？」

彼女は怯^{おび}え、声を震わせる。

「何でもするって言ったのは、きみだろう？」

蠱惑的な笑みを浮かべた瀬名は、一楓の髪を留めているゴムを取り、三つ編みを解く。そして彼女の眼鏡を両手で外して、床に置いた。

野暮ったい少女の素顔をまっすぐ見つめ、瀬名は満足そうに口角を上げる。

「僕を黙らせたのなら、方法はひとつだ。いやらしい委員長なら、わかるよね？」

その甘い囁きは、誘惑にも似た危険な香りを漂わせていた。

「こ、断ると言ったら？」

一楓は逃げようとしたが、いつのまにか腰に添えられていた瀬名の手引き寄せられる。

「ふふふ、そんなこと言わないよ。委員長は賢いから。たった一度のセックスで、秘密を守る。一度すれば、僕は口外しないし、僕からきみに関わることはない。いいだろう？」

彼の手が、一楓のブラウスのボタンをひとつ外す。

「つまりわたしを、一度きりの遊び相手にする、ということ？」

「……さあ？」

「馬鹿にしないで！ わたしは、チャライあなたの取り巻きとは違う」

窓の外で雷が光ると同時に、乾いた音が響いた。一楓の手のひらが、瀬名の頬を打ったのだ。

その音があまりに大きくて、平手打ちした一楓の方が顔を歪めてしまう。

「こ、ごめ……」

瀬名は深く傷ついたような表情で——辛辣な声を放った。

「きみを抱こうと思う変わり者が、この先に僕以外に現れると思ってるの？ いないとわかってるから、きみだってBLなんてものに夢中になったんだろう？」

雷が落ちた音がした。

BLを愛する心は自分を慰めるためのものではない。そう思っているのに、彼の言葉に心を蝕まれ、一楓は泣き出しそうになってしまふ。

瀬名はそんな彼女の顎に手を置く。

「二次元の男より、リアルな男に目覚めさせてあげる」

海底を思わせる濃藍色の瞳の奥に、炎のようなものが揺らめいた。

瀬名は一楓の唇に親指を差し込むと、そのままそこをこじ開ける。

「だから……僕を見て。あいつではなく、僕の方を」

そして、傾けた自分の顔を近づけ、切なげに名前を呼んだ。

「一楓……」

——その日、一楓は流されるように、口封じの取引をしたのだった。

それから四年の月日が経ち、冬が訪れた。

大学四年生となった一楓は、授業終了直後にメールのチェックをして、机に突っ伏した。就職試験の不採用通知が届いていたのだ。

「はあ……。手応えあったから、懸けていたのに……」

関東の難関大学、帝都大へ進学したのは、一流企業への就職に有利だと思ったから。それなのに、就職活動は全滅。ここまでくると、人格を否定されている気分にもなる。リクルートスーツにひつつめた黒髪、黒縁眼鏡、薄化粧。周りとの差異がない格好で就活をしているつもりだが、生まれ持ったものがみずぼらしいのだろうかとまで考えた。

あまりにシヨックで、みんなが退席しても、一楓は席から立ち上がることができない。そんな一楓の傷口を抉る言葉が、後ろから聞こえてきた。

「筆記は高得点なのに、面接で落とされ続けているんだって？ ……委員長」

この大学で一楓の高校時代のあだ名を知っているのは、唯一同じ高校出身の彼だけだ。振り返ってみると、そこにいたのはやはり彼だった。

栗毛色をした、柔らかなストレートの髪。上品で端麗な顔立ちをした男——瀬名伊吹が、一段上の席に座り、一楓に微笑みかけていた。

彼はこの難関大学でも首席という、ずば抜けた頭脳を持つ。その上に、日本を牛耳る大企業である瀬名グループ総帥の次男坊——つまり御曹司だ。

一楓とは違う進路を噂されていたのに、なぜか一楓と同じ帝都大に進学し、新入生代表で挨拶して、彼女を驚愕させた。それから彼は、大学でも常に話題の中心にいた。

そんな彼とは、高校三年生の時に口封じの取引をして以降、口をきいていない。

約束通り、彼から関わってくることもなく、平和な大学生活を送っていたのに——四年経った今、声をかけてきたのである。これは約束違反だ。

一楓は眉間に皺を刻んで不快感と拒絶を示したが、瀬名はそんな抗議をもとめせずに美しい微笑みを向けてきた。

「ふふふ。委員長、怒りに毛を逆立てた猫みたいだよ。フギーツて」

「誰がそうさせているんですか」

「ああ、ごめんね、委員長。ねえ、噂で聞いたんだけど、就職全滅なの？」

目下の悩みを言い当てられて、一楓は言葉に詰まった。

「きみのお父さん、リストラ食らったんだらう？ たしか、妹と弟がいるんだっけ？ ふたりも大進学を希望しているなら、資金繰りが大変だ」

誰にも言っていない家庭の事情が、瀬名の口から出てきたことに驚いてしまう。

「っ、どうしてそれを！」

「風の噂だよ、委員長」

残念ながら一楓には、身の上話をするような友人がいない。噂が立つはずもないと首を傾げていると、瀬名は畳みかけてくる。

「もう冬になるぞ？ きみだけじゃないか、この帝都大で就職先が見つからないのは」

「余計なお世話です」

こんな嫌味を言うために、絡んできたのだろうか。

瀬名は就活をしなくても、実家の一流企業に勤めることができる。就活は他人事なのだ。だからといって、就職できない一般人の傷を抉らないでほしい。

「ここからが本題なんだけど——僕の会社に来ない？」
唐突な提案を、一楓は即座に断った。

「冗談や同情は結構です」

「悪いけど、この上なく本気だ」

瀬名の顔は大真面目で、からかいの色は見えない。

「それでも、委員長の高能力を高く評価しているつもりだ。僕は、優秀な人材が欲しい」
ふたりの間にあったことには触れず、彼はそんなことを言う。

「わたしが優秀かはさておき、あなたの会社に来いとは？ 瀬名グループの会社に就職しろ、というんですか？」

瀬名があまりに真剣なものだから、一楓はつい聞いてしまった。

「違う。僕が今年の夏に設立した『イデアシンヴレス』。ITベンチャーだ」

そういえば、そんな噂を耳にしたことがあった。瀬名は大学生ながら、株で資金を集めて起業した。

真面目と根性だけが取り柄の一楓とは違い、瀬名は神から二物も三物も与えられた人間だ。学力が秀でているだけでなく、高校時代は絵や運動でも賞を取るほどの多才ぶりを発揮していた。

「イデアシンヴレスを大きくしたいのに、人材が集まらない。誰も僕についてこれないから、僕がしたいこともできない。そのせいで僕ひとりですべての業務をこなしていて、てんやわんやなんだ」

その話で、一楓は高校時代のことを思い出し、納得する。

彼が生徒会長だった時、彼のハイレベルな要求に、誰もが尻込みした。妥協しない瀬名のせいで、委員会は長引くばかり。そのせいでバイトに遅刻しそうになった一楓が、具体的な支援案を出し、場をまとめたこともあった。

「給料もボーナスも、ちゃんと出す。福利厚生だって整える。それだけの仕事はしている」

正直、就職先が決まらなくて焦っていたので、喉から手が出そうになる。

ただそれは……瀬名が社長を務める、瀬名の会社でないなら、の話だ。

再び断りの言葉を口にした瞬間、彼は頭を下げた。

「頼む、設楽。僕にはきみが必要なんだ」

高校時代から思い出しても、彼がひとに頭を下げるところを見るのは初めてだ。

よほど切羽詰まっているらしいと悟り、一楓はとりあえず、彼の会社に赴くことにした。

職場を見て、改めて条件を聞いてから断っても遅くないと思ったのだ。

案内された仕事場は、想像以上に広く、職場環境も整えられていた。そして、瀬名から仕事内容の説明と仕事への情熱を聞いて——一楓は心を打たれた。

彼の下で働きたいと願い、決意する。

自分で決めたからには、不埒な戯れをした黒歴史は忘れることにした。新たな気持ちで社長に仕えようと、心に誓う。

それほど、瀬名が真摯に語る会社の未来に、魅力を感じたのだ。

「誠心誠意努めさせていただきます。ご指導のほど、よろしくお願ひします。瀬名社長」
その時の瀬名の笑顔は忘れられない。とても嬉しそうで、一楓の胸はどきんと高鳴った。

そして——事務員として雇われたと思っていた一楓は、気づけば彼によって、プログラマー兼
S Eに育て上げられていた。
夢と希望に満ちて入社したはずの会社が、実は納期至上主義のブラック企業だと悟った時には、
すでに引き返せなくなっていたのだった。

第一章 それは、あくまでブラックで

瀬名社長の下で働きはじめて丸四年が経った今、一楓はアイデアシンヴレスについて冷静に評価する。この会社は、ブラックだ——と。

東京にあるオフィス街の一角に、アイデアシンヴレスが入ったビルがある。外観の印象より広いフロアを持つ建物の、五階と六階を借りていた。

アイデアシンヴレスは、企業向けのシステム開発・運用保守や、データ分析・集積を主とした、プログラミング作業を主軸にしている会社だ。

それぞれSEが指揮する四つのチームがあり、各チームには五、六名のプログラマーがいる。そのチームごとにSEの指示に従い、システムを動かすコードを作成するのだ。

そのSEの上には、各チームを統括管理するPLがいる。そして、彼らはアイデアシンヴレスの司令塔であるPM——瀬名伊吹社長の指示を仰いでいた。

彼は弱冠二十七歳にして、すべてのプロジェクトを把握し、動かすことのできる敏腕社長だ。その甘いマスクとは裏腹に、仕事に対しては厳しく真摯で、誰よりも精力的に働いている。

一楓は会社に入るまで知らなかったのだが、瀬名は高校時代、趣味でパソコンのソフトウェア——OSを開発したことがあったようだ。それは試作品ではあったが、IT業界で話題に

なつたほどで、当時からプログラマーとしての腕は一目置かれていた。

その上、卓越した提案力や営業手腕を武器に、アイデアシンヴレスは近年大企業から仕事を依頼されるほどになっている。

しかし、瀬名は現状に満足していない。どんなに実力のある社員を揃えようとも、歴史の浅い会社は、知名度や信頼度が足りない。

この業界では、知名度がある会社だけが生き残れる。知名度を上げるには、地道に実績を積んで、顧客の信頼を得るしかない。

そのため、彼は社員に自分と同等の仕事の質を要求する。だが社内には、天才肌の瀬名に匹敵するレベルの社員はいなかった。

彼と同等の出来を求められることは、普通の社員にとって無謀で無慈悲な命令だ。なんとか達成するために時間と労力を注ぎ込むしかない。

給料は安くはないが、『きつい』『帰れない』の2Kのブラック企業、アイデアシンヴレス。

しかし天才・瀬名に魅せられ、脱出できない。彼に認められ、賛辞の言葉を得ることは、とてつもない達成感となり、社員の心を掴んでいる——と、一楓は考えている。そして悲しいかな、自分もそんな社員のひとりなのだった。

蒸し暑い六月下旬。一楓は瀬名と共に、都心にある高層ビルにいた。

ここ『帝都グループビル』は、帝都グループの関連会社が入り、レストランやショッピングエリ

アも併せ持つ複合商業施設だ。この地域の新たなランドマークとしても注目されている。

その七階にある帝都グループ協同組合へ、一楓たちはやってきた。以前仕事を請け負った会社からの紹介なのだが、なんでも帝都グループ協同組合の保険事業課は、仕事を発注した業者が途中で手を引いてしまい、とても困っているらしい。

そんなとても困っている組合の萩課長は、薄毛の頭を何度も撫でながら話す。

「我が組合は、ホテル、デパート、レジャー施設を全国で運営している、あの帝都グループの社員のための協同組合。組合員は約三万人いる」

萩課長はぐふぐふと笑い、自慢を続ける。

彼の向かいに座るのは、濃灰色のオーダースーツに濃藍色のネクタイを締めた瀬名だ。課長の自慢話に相槌を打っている。

そして一楓は、瀬名の片腕として、彼の隣で辛抱強く笑みを浮かべていた。PM補佐という肩書きだが、PLもSEもプログラマーも、なんでもこなす。おまけに秘書のような役回りも押しつけられていた。

黒髪をまとめ上げ、黒いスーツに身を包んでいるが、地味なだけの学生時代とは違う。瀬名に命じられ、成人女性の嗜みとしてきちんと化粧を勉強したため、一応見られる程度に整っているはずだ。

体裁だけは取り繕ったつもりだが、一楓の内心は穏やかではない。それは目の前で話を続ける萩課長のせいである。

「前の業者は本当に酷かった。使い勝手の悪いシステムを納品したくせに、変更を頼むと、ちよいと直すだけなのに、人件費がどうのと改修費用をつり上げてくる。堪忍袋の緒が切れて、契約を解除してやった」

今回、協同組合が業者に発注したのは、保険契約者の情報や契約内容を、一元管理できるシステムだ。

さらに保険料の口座引き落としができる請求データを作れるよう依頼していたらしい。

しかし、納品されたシステムは一元管理ができて、一台しか利用できない専用端末だった。それでは使い勝手が悪く、客からのたくさんの問い合わせに、事務員が応じ切れない。

さらに未改修のままの部分もあり、このままでは正常な引き落としができないと、手を焼いているらしい。

システム改修だけならば、イデアシンヴレスは十日もかからず終わらせるだろう。

だが他社が作ったシステムを精査せず、安易にプログラムを組み込むのは危険だ。どんな欠陥が生じるかわからないからである。操作する側のミスが、欠陥に繋がることもある。

検証の時間を十分にとれず、万が一のことがあった場合、この課長は全責任をイデアシンヴレスに押しつけてくるだろう。そんなリスクが高い案件は、他の業者も受けたがらない。もちろん一楓としても、まっぴらごめんだ。

(大体、帝都グループがなによ。瀬名グループの方が、よっぽど大きいじゃない)

一楓はそう思って瀬名をちらりと見るが、彼は涼しい顔をしている。

「それで、そのシステムの改修とやらを、きみたちの会社に任せるよ。——そうだ。この先、長い付き合いになるだろうから、夜に軽く一杯どうかね?」

課長はげふげふと笑いながら、一楓にねつとりとした視線を送った。断られるとは微塵も思っていない、この傲慢さと危機管理能力のなさ。

腹が立った一楓は、笑顔で話を逸らしながら、瀬名の靴を踏みつける。

(考える必要もなし! 引き受ける義理はないのだから速攻断るべし!)

しかし、瀬名の答えは——

「予定があるため、大変恐縮ながらお酒の席はまた改めてとさせていただきますが、お仕事はお受けいたします。ただ、システム改修ではなく、別の形で進めたいと考えております……」

ビルを出た一楓と瀬名は、彼の車に乗り込んだ。そして一楓は、保険制度とシステムに関する資料やマニュアルを詰め込んだ紙袋を膝に置き、頭を抱える。

「無謀にもほどがありますよ、社長! 既存のシステム改修ではなく、一からシステムを構築するなんて! しかも一週間で! わたし、何度も靴を踏んづけて止めたのに!」

「見知らぬプログラマーが作ったものを解析している時間はない。前にうちでパッケージ販売した保険システムがあったろう。あれに改良を加えて、画面を似たようなものにすれば、金額を抑えて今以上のものを提供できる。多めに見積もった金額でもかなり安いと、課長は喜んでいただろう?」

瀬名はネクタイを少し緩めると、なんでもないのでのように言った。

「あの課長に義理はないけれど、彼らを助けて恩を売れば、帝都グループに入り込めるチャンスができるんだ。いい仕事じゃないか。それに僕たちが卒業した帝都大は帝都グループだし、縁があるとは思わないか？」

「帝都大だから、帝都グループだから、なんですか。だったら瀬名グループの方が……」
涙目で言う一楓に、瀬名は輝かしい笑みを向ける。そして優しい口調で言った。

「ということ、今回の件はきみのチームに頼む。戻ったら保険制度とシステムの資料を読んで、なんの機能が必要か判断してくれ。その上で設計図と構築図、割り振り表を作って、今日中に僕のところへ持ってきて」

「わたしのチームですか!? なぜに!？」

一楓はPL兼SEとして、二年間苦楽を共にしてきたチームを持っている。プログラマーのうち三人は、複数の国家資格を持つ精鋭たちだ。

しかし現在、一楓以外のメンバーは休暇中である。なぜ瀬名が指定してきたのかわからない。

「そりゃあ、早くて確実に僕好みだから」

瀬名は意味ありげに笑いながら、一楓の黒髪に指を絡ませた。

一楓は瀬名の手をべちんと払うと、両手で顔を覆おおう。

「あなたの信条は、この四年でよくわかったつもりよ。でもうちのチームは、二日前まで一ヶ月詰詰で、ようやく納品できたの。わたしはどんな顔で休暇中のみんなを招集すればいいの？」

「僕からメールを出してもいいよ? 『間に合わせないとクビ。だけど間に合わせたらボーナスを

出し、確実に休みを支給する』って」

通じないのはわかっていながら嘘泣きを試してみたものの、瀬名は笑顔でそう言った。絶対に断らせないその口調に、一楓は観念してうなだれる。

「はあ……。イデアシンヴレスが、こんなブラックだったとは……」

「もちろん、僕も一緒にやるから。ね?」

瀬名が優しい口調でなだめても、一楓は顔を上げない。

「……反対するなら、きみのお父さんをクビにするよ?」

「うう……。鬼っ、悪魔っ!! この腹黒エセ王子!!」

一楓は涙目で顔を上げ、彼を睨にらむ。瀬名は笑いながら頭を撫でてくるが、彼女はその手をばしりと払って、またもや両手で顔を覆おおった。

一楓が瀬名の会社に就職すると決めると、彼は無職だった一楓の父を、瀬名グループの系列会社に入社させてくれた。そのおかげで家族は路頭に迷わずに済み、一楓も安心してひとり暮らしができていた。

それにはもちろん感謝している。しかし、この男はいつも強引に仕事を進めるため、一楓は泣いてばかりいる気がして、やりきれない。

ずっと瀬名の下僕感が抜けず、涙目で文句を言うことしかできないのだった。

一楓と瀬名が、帝都グループ協同組合から戻った翌日、午前十時――

アイデアシンヴレスの五階にあるミーティング室で、一楓は自チームのプログラマー五名を呼び出し、愚痴を聞いていた。

「俺、嫁と子供を連れてネズミーランドの公式ホテルに泊まっていたのに」

「ごめんなさい、葛西さん」

三十八歳のベテランプログラマーの葛西肇は、髭もじゃで山男のような風貌だ。彼は、ファンシーなネズミのイラストが描かれたTシャツと半ズボン、カチューシャ姿で現れた。

それは彼の精一杯の抵抗だろうと察したが、ネズミの耳がついたカチューシャは、さすがに一楓が外してあげた。

「私……彼氏とようやくイチャイチャできると思ったのに」

「ごめんね、幸子ちゃん。付き合いはじめたばかりなのに」

次に肩を落としたのは、二十四歳の雪村幸子。瓶底眼鏡をかけており、昔の一楓に似て、地味で幸薄そうに見える。男に無縁と思われたが、一ヶ月前に初彼ができた嬉しそうに語っていた。しかし今は、怨念がこもった不気味さを放っている。

「俺っちに電話がかかってきたのは、ジャングルに向かうために空港に着いた瞬間でした」

「ごめんごめん、宮部くん」

二十三歳の宮部賢一は、学生時代からプログラムのコンテストで入賞を繰り返していた、実力派の若手だ。一番こき使われていた彼だから、どこかのネジが緩んでしまったのだろう。ジャングルに行こうとしていたらしいが、首からぶら下げている虫かごになにを入れる気だったのか、一楓に

はわからない。

他のプログラマー二名も、はっきりと言わないが不満そうな顔をしている。

一楓はチームのメンバーに向かって、思い切り頭を下げた。

「みなさん、本当にごめんなさい！」

彼らは、瀬名が選んだ腕利きのプログラマーである。どんな不可能なことででも可能にする瀬名に魅了され、不満を抱えながらも結局、瀬名の命令に従う。

そんな従順な社員たちなのに、瀬名はみんなを社長室に入れようとしない。社長室への出入りが認められているのは、一楓だけだ。それは瀬名がひとの技術を信じていても、人間性を信じていないからなのではないかと、一楓は思っている。

(社長を慕う部下はたくさんいるのに、それは寂しいことなんじゃないかな……)

そこでコンコンとノックの音が響き、瀬名がミーティングルームに入ってきた。一楓に不満をぶつけていた部下たちは姿勢を正し、顔をひきしめる。

瀬名は一回を見直し、口を開いた。

「休暇中だったのにすみません。みんなも知ってる通り、アイデアシンヴレスはもう少して創立五周年。まずまずの経営状況だが、僕としては、もつと我が社の実績として評価される大きな仕事が欲しい。そのため、帝都グループ協同組合のシステムを、大至急作り上げることにした」

帝都グループの名前が出て、部下たちはどよめいた。瀬名は彼らに頷きかけ、話を続ける。

「システムの構築は素早く正確におこない、検証に時間を取りたいと思っている。そこでこの仕事

は、我が社の精鋭であるみなさんに頼みたい。このシステムを納品したら、今回消化予定だった有給休暇プラス二週間の休みとボーナスをつける。どうかここを乗り切ってほしい」

瀬名が頭を下げると、部下たちはさつきまで不満を漏らしていたとは思えないほど、あっさり額いた。

それを満足げに見て「ありがとう」と礼を述べ、瀬名は一楓に声をかける。

「設楽、説明を」

「はい」

一楓は立ち上がり、昨日ほぼ寝ないで作った資料を部下に渡して回った。それから、仕事の概要を説明し、すでに瀬名と綿密に打ち合わせた工程や割り振りを発表する。

「今回の仕事は帝都グループの社員、約三万が組合員の保険事業システムの構築です。専用線で繋いでいた専用端末をやめ、サーバーを導入。各PCからブラウザ上での入力及び閲覧を可能にします。以前作った保険システムの改良版を作る形となりますが、根幹の変更部分は社長にお願いしています。追加修正が必要なプログラムは資料の通り。各自担当を確認してください。それと……」

資料に目を通しながら書き込みをする部下たちを見て、一楓は一度言葉を切る。

「社長もおっしゃられていましたが、今回はシステムの検証に時間を費やしたいと思っています。

納品は六日後、金曜日。システム開発に三日、検証に残り三日を使う予定です。その次の月曜日に請求処理があるそうなので、そこに間に合わせます。以上です、質問は？」

過酷な日程にメンバーがざわつく中、宮部が手を上げた。

「各PCで使用できるようにするとすれば、安全性や処理速度に心配があります。通常のユーザ認証やパスワード認証だけでは、悪意ある第三者に乗っ取られる可能性があるのでは？」

それに答えたのは、腕組みをしていた瀬名だ。

「ああ。だから僕がセキュリティプログラムを作る。僕が作るんだから大丈夫」

自信満々な俺様発言に、一楓はため息をつく。しかし瀬名に絶大な信頼を寄せる部下たちは、それだけで納得したようだ。

瀬名の言葉を部下が信じるのは、彼にはひとを圧倒するほどのやる気と、無理を押し通す力があるからだ。さらには、問答無用で部下をまとめ上げる絶対的カリスマ性まである。

そのおかげで、イデアシンヴレスが2Kのブラック企業だとわかっていながらも、社員は訴えるどころか、暴君のために身を粉にするのだ。

(もうホント、瀬名様ワールド)

自分もそのひとりだと自覚しつつも、一楓は心の中でため息をつく。

しかし、これだけ瀬名を妄信する部下が集まっているにもかかわらず、不思議なことに彼を異性として求める女の影はない。実際この四年間、彼は女の影をまったく感じさせず、ずっと仕事をしている。

自分が作った会社を成功させるために女を切り捨てているのだろうか。それとも、学生時代にたかさんの女たちを食らいつくして、食傷気味なのか。

今、彼が許容している女性は、仕事の関係者のみ。しかも、彼に恋心を抱くことはなさそうな女

性ばかりだ。

そこまで考えて、一楓の胸はなぜかスツと冷たくなる。

瀬名が自分を仕事のパートナーにしたのは、高校時代に体を重ねたことをなかつたことにしているから。そして一楓が今後も彼を男として意識したり、恋心を抱いたりしないかと踏んでいるからだろう。

胸にモヤツとしたものが広がる。同時に、瀬名の声が頭の中でよみがえった。

『一楓、可愛いね。こんなにとろとろにさせて、イクの何度目?』

一楓が情事の記憶すべてを消し去りたいと思っっているように、瀬名もこんな女と関係を持つてしまったことは黒歴史だと思っっているのだろう。

『わかる? 僕が、きみの中にいること。ああ、最高だ……』

あるいは――処女を摘まみ食いするのは、瀬名にとっては思い出すこともないほどありふれた日常だったのか。

『きみを抱こうと思う変わり者が、この先に僕以外に現れると思ってるの?』

その言葉に呪いをかけられたかのように、一楓に近づこうとする男はいない。……仮に誰かに弱みを握られ、瀬名と同じ条件を出されても、もう二度とごめんだ。

『はっ、あ、一楓、い……ちか……っ』

上擦った官能的な声。濡れてとろけた濃藍色の瞳。汗ばんで紅潮した、熱い肌。匂い立つ、男の香り――

そこで一楓はハツとして、太股に爪を立てる。

(ダメダメ、思い出すんじゃないの!)

女を優しく抱くのは、チャラ男の常套手段。女をその気にさせるための睦言を真に受けるほど、自分は馬鹿ではない。そのはずなのに、時折体が熱く疼いてしまう。

(消える消える消える消える……)

あやまちの元凶となったBLマンガは、あの後すべて押し入れに封印した。

それにもかかわらず、どうしてあの日の思い出はよみがえってしまうのか――

そこで瀬名は一同を見回すと、話を切り上げた。

「質問は以上でいいね? では、各自お願いします。設楽はこの後、社長室に来て」

「はい、わかりました」

一楓は気合いを入れ直して、瀬名と共にミーティングルームを後にした。

社長室は広く、やや殺風景に思えるほどシンプルに整えられ、黒一色でまとめられている。

(ブラック企業のボスの居城は、いつ見ても黒いわね)

その空間は、絶えず電話が鳴り続ける、現場と変わらぬ戦場でもあった。

電話はどれも、社員たちから判断を求めるもの。瀬名は社長室に入るやいなや電話を取ると、肩に挟んで応答しながら、執務机にあるふたつのパソコン用のキーボードを操る。

瀬名は一度電話を切ったが、また電話が鳴った。それを素早く取ると、壁にかけられた液晶に映

るプログラミングを見つめ、解決策を指示する。

その処理能力の高さに、一楓は舌を巻く。随分と頑張つて、畑違いだったプログラムやITの世界を勉強してきた。だが、瀬名の仕事ぶりは、努力型の凡人である自分には逆立ちしたって真似できない。

彼はイデアシンヴレスの頭脳だ。一楓がいなくても会社は回るが、瀬名がいなければ回らない。実力の差と社員からの期待度の差は、努力では縮めることができないのだ。

それを実感している一楓は、応接ソファに座つたため息をつく。ふと、足元に埃が溜まつていることに気がついた。

社長室を一度出て清掃用のモップや雑巾を持つてくると、瀬名の電話が終わるのを待ちながら室内の掃除をはじめた。応接スペースの掃除を終え、今度は執務機の周囲に手をつける。瀬名は電話を耳に当てたまま、一楓の邪魔にならないようにスツと移動した。

一楓が机の上を見ると、雑誌が開いたままになっている。

そのページには、世界のIT権威者が集う国際フォーラムについて特集されていた。そのフォーラムは来週の日曜日に東京で開催され、世界中のITコンテストの入賞者が招待されるらしい。

そういえば、IT系のコンテストについて、瀬名は以前ぼやいていた。

『去年参加者を募っていた新設のコンテストがあるんだけど、参加してみたかった。応募締め切り時に創立五年以上という規定があって、イデアシンヴレスではまだ一年足りなかったんだよね。もしこれで入賞できれば、創立五年の節目に箔がついたのに』

なぜか彼は、昔から創立五年というものにこだわっている。一楓は祝賀会でも開催すればいいと思うのだが、仕事で思い出作りをしようと考えるあたり、瀬名は仕事中毒と言えるのかもしれない。学生時代は遊び人と噂されていたことが、嘘のようだ。

(それでこそ、わたしが頑張つてついでにいきいたいと思える社長だけだ……)

一楓は微笑みながら、雑誌を閉じて机を拭いた。

十数分後、瀬名はやつと電話を終え、社長室に静寂が訪れた。それから彼は黒革のソファに足を組んでゆったりと座ると、向かいで縮こまる一楓を穏やかに眺める。

「四年経つのに、まだこの部屋に慣れない？」

「どうやら彼は、一楓の様子を『社長室にいると緊張する』と捉えているらしい。しかし一楓が萎縮しているのは、単に社長室だからではない。

静かになった彼の牙城では、なぜか一楓を見る瀬名の眼差しが甘くなるからだ。それまでどんなに仕事命の厳しい瞳であつても、途端に柔らかく優しい雰囲気になる。

その眼差しにいたたまれなくなるから——などと言うことはできず、一楓は彼の勘違いに便乗した。

「慣れませんか。ここは聖域というか、恐れ多い空間なので」

「あははは。きみはぼんぼんと僕に言い返すじゃないか。別に神聖視なんてしていないくせに」
文句にも聞こえる言葉を流して、一楓は話題を変える。

「あの、社長。社長室に自由に入出りできる社員を、増やしたらどうですか？　うちの社員はみんな、社長を心から慕っていますから、信頼して大丈夫だと思います。全体を統括できる社員を、この部屋に入れるべきです。もし今いる社員だと力不足だというなら、新しく雇ってもいいのではないですか？」

「どうして？　僕にはきみがいるじゃないか」

「いや、でもわたしは、社長がこの部屋で何人もの相手をされていて、まるで手伝えないじゃないですか。だったら、社長の手足として動けるひとを……」

「……いい加減、その言葉遣いやめてくれないか？」

突然、瀬名は目を細めて一楓の言葉を遮り、不愉快そうに言った。

「他にひとがいる時ならともかく、ふたりきりになっても、きみがそんなにあらたまった口調だと自分がとても老けたように感じるよ。僕、きみと同年なんだけれど」

「駄目です。わたしは雇われている身なんですよ。話を戻しますが、わたしはITに関して社長についていけず、せっかくなこの部屋に入れていただいても、役に立つことができていません。ひとを雇ってください。ひとりでそんなに色々なものを抱えて走り続けたら、いつか体を壊して……」

「あのさ、委員長」

瀬名はわざとらしく昔のあだ名を口にして、またも一楓の話の話を遮る。

「確かに僕は走り続けてきた。そうしているうちに、三週間後には創立五周年だ。この五周年という節目は、僕にとつて大きな意味がある。この五年間、僕は利益と会社拡大のために、私情を抑え

込んで奔走してきた。きみに鬼だの悪魔だの言われても、本当によく我慢して会社に尽くしたと思う。僕からすれば、僕は社員の誰よりも社畜だ」

「はあ……」

(突然の仕事中毒自慢をはじめて、なにが言いたいの？　褒めてもらいたいの？)

瀬名の真意を推し量ることができず、一楓は眉間に皺を寄せる。

すると瀬名はため息をつき、前髪を掻き上げながら語るように言った。

「だからさ……僕が全神経を仕事に集中させてきたから、きみは自由でいられたんだよ？」

彼の切れ長の目が鋭く光った気がして、一楓はぞくりと震える。しかしその言葉の意味を考え、首を傾げた。

(……それって、わたしが無能なことを社長が我慢してその分働いてきたから、わたしは自由でいられたって言いたいのか？　いやいや、社長にこき使われて、わたしもこの四年一緒に全力疾走してきたし。そりゃあ天才には及ばないけど。わたしだって死に物狂いで努力してきたこと、気づかなかったわけ!?)

一楓は口を尖らせて物申す。

「自由、ですか？　わたしだって、休み返上で働いてきました。ええ、遊ぶ間もなく、遊ぶ相手もなく。久しぶりの休みに家で寝ていたくても、買い物に行きたくても、あなたに呼び出されて会社に来ていましたよね？」

「きみの体は拘束したが、きみの心は拘束していない。拘束していたら、今頃きみは、ひとりでい

たいとは思わなくなる。いや、いられなくなる」

謎めいた色香を漂ただよわせて、瀬名は続ける。

「それに、僕だつてなんの目的もなく社畜になつたつもりはない。平日も休日も、きみに遊ぶ相手がいなくても、僕はそばにいた。この四年、きみのそばにずっといたのは僕だけだ。……わかる？ この意味」

彼の眼差まなざしと声音は、どんどん甘くなる。その意味がわからず、一楓はまたも首を傾かしげる。

「まあ、最高責任者である社長も、わたしと一緒にずっと会社で仕事をしていて、休みなしですね。確かに大変だわ。……そうか。休みたいんですね？」

一楓はハツとすると、ポケットから瀬名のスケジュール帳を取り出す。

「急ぎの協同組合のシステムが終われば……再来週らいしゅうですと……」

「違う。そういう意味じゃない。仕事に関してはすぐに僕の心を察してくれるのに、なんでそんな結論になるんだよ……」

「え？」

一楓はきよんととして、こめかみに指を当てる瀬名を見た。

「……手帳はしまつて。はあ……これだけあからさまに僕から鼻屑ひじを受けているのに、むかつくらい通じてない」

瀬名は目頭を揉んで疲れた声で言う。しかし、その言葉は聞き捨てならない。

「鼻屑？ どのあたりが？ ずっとこき使われてきて、これからまた過酷な仕事をしないとイケな

いのにな？」

「……きみだけが自由に社長室に入れることを、どう思っている？」

「高校時代からのよしみで、一番付き合いが長くて気が置けない相手だからでしょう。そのせいでわたしはこき使われていて……」

「僕がきみだけを連れて歩くことは？」

「秘書みたいなもので……」

「きみの家まで僕が車で送り届けることは？ きみが好きなスイーツを買ってきてあげること？」
そう言われてみれば、そんなこともある。しかしそれはただのご機嫌取りではないのか。

「わたしがやめないように、時々アメをくださっているのでは……？ 特にこの部屋に入れる秘書のポジションは、わたししかいませんし」

その瞬間、瀬名が爆はぜる。

「秘書が欲しいなら、とつくに秘書を雇っているよ！」

「な、なんで怒られないといけないんでしょう？」

一楓は驚き、彼の迫力に背を反そらしながら尋ねた。すると瀬名はため息をついて彼女の胸を指さす。

「薄々思つてはいたが、四年も僕のそばにいたのに、きみのココはまったく成長がないね」

「そ、それは、貧乳ということですか？」

「違う！ きみの胸はもうたっぷりあるじゃないか！ 心の話だよ！」

ものすごい剣幕の瀬名に、一楓は気圧けおされてしまう。

「は、はあ」

「きみは……僕のことをどう思っている？」

突然、切なげな目を向けられ、社長室からふっと音が消えたような気がした。

一楓はその質問にまっすぐ答える。

「——瀬名グループ総帥のご子息で、元生徒会長で、元同級生で、父の恩人で、社長……ですが？」
その答えに、瀬名は美しい顔をわずかに歪ゆがめ、表情を曇くもらせた。しかし一楓は、間違ったことを言っていないはずだ。

「え、どこか間違ってます？ 他にもなにかありましたっけ？」

「……正解だよ。悔しいくらいに正解だ」

瀬名は拗すねたように横を向いてしまう。なぜ正解したのに彼が不機嫌になったのかわからず、一楓の頭の中はハテナマークだらけになる。

「——いまだ僕は、男ではない、か。きついな……」

瀬名がなにか呟つぶやいたが、よく聞こえずに聞き返す。

「今、なにかおっしゃいました？」

「いや……」

そこで一楓は、ハッと今朝のことを思い出した。これについては、瀬名を問い詰めないといけな
いと思っていたのだ。

「そういえば、社長。今日出社途中に、ガンちゃんに声をかけられたんですよ。覚えてます？ 高校で同じクラスだった、岩本典枝いわたのりえ。同窓会の幹事をしてるらしいんです」

岩本典枝はショートカットに眼鏡をかけた、社交的な子だ。異性からも同性からも好かれる、面白い同級生だった。

カメラ小僧ならぬカメラ小娘で、一眼レフのカメラを首から提さげて、瀬名を追い回していた気がする。学校の王子だった彼の写真は需要が高かったのだ。しかも新聞部に所属していた彼女に、知らない情報はないと言われていた。

「彼女、今は新聞記者をしているそうです。ガンちゃんについて、なにか思い当たることはありません？」

「さあね。なにもないけど」

瀬名は一楓と目を合わせず、どうでもよさそうに返事をした。一楓は彼に白い目を向ける。

「社長。入社当初わたしが携帯を水没させて今のスマホに変えた時、ガンちゃんにわたしの新しい電話番号を伝えてくれるとおっしゃいましたよね。でも、ガンちゃんは聞いてないと言っていました。わたしの連絡先は誰も知らない状態で、行方不明扱いだったと！」

そこまで言っても、瀬名は知らんぷりだ。一楓は詰じむように声を大きくする。

「しかも！ あの情報通のガンちゃんが、わたしがあなたの会社に勤めていることも知らないって、おかしくないですか！ ガンちゃんは社長に、わたしの消息を知っていたら教えてほしいと声をかけていたって言っていましたよ！」

すると瀬名は、面倒臭そうに答える。

「ああ、昔そういうことがあったかもね。仕事に忙殺されて連絡を忘れてしまったな。きみもわかるだろう、仕事の大変さは。メールをチェックしている余裕もないことくらい」

「ええ、わかります。わかりますが……ガンちゃんは、今月に入って何度も、しかも昨日も、社長と電話で直接話したって言っていましたよ?」

一楓はじとりと目を向けるが、瀬名は横を向いたままだ。

「そうだったかな? 用件も忘れるほど些細なことで、すぐ切ったから」

「用件は、次の金曜日に開かれる、同窓会のお誘いだったそうです」

「へえ」

瀬名の白々しい反応に、一楓は語気を強める。

「ガンちゃんは、同窓会のたびに社長に連絡していたと言っていました。ちなみにわたしは、社会人になってから同窓会が開催されていることは、一度たりとも、社長から聞いていませんが!」

彼は不愉快そうに顔を歪めると、ようやく一楓に向き直った。

「つまりきみは、同窓会に行きたいわけか?」

「行きたいってどうか……」

「じゃあ、行きたくない?」

「べ、別に行きたくないわけでも……」

はつきりしない一楓に、瀬名は苛立ったように目を細める。

「……あのさ。この忙しい時期に、同窓会なんて行けると思うの? わかる? 次の金曜日ってこ

とは……協同組合のシステムの納品日だ。場合によっては、夜遅くまでかかる」

「……はっ」

(それとその日、わたしの誕生日なんだよね……)

しかし瀬名は、社員の誕生日なんて知らないだろう。

「しかし社長。行けないにしても、誘いも来なくなるのは寂しいというか……」

「それは、きみの自己満足だろう? 僕は同窓会に行かない。まさかきみが、仕事中の社長を置いて同窓会に参加するはずはないだろうとは思うけど」

確かに、瀬名が仕事で忙しくて同窓会に行かないのに、自分だけ行くのは気が引ける。一楓の性格上、気にせず同窓会に参加することはないだろう。

「……それは、そうかもしれません……」

「だったら話は簡単だ。暇人だけが、遊んでいればいい。僕たちには関係ない。それより……岩本に連絡先を教えてくださいましたの?」

うかがうようにそんなことを聞かれて、一楓はなにを当然のことと呆れた。

「はい」

「結局、行きたいんじゃないか」

「そういうことでは……」

「……会いたいんだろう、あいつに」

あいつとは誰のことか、と一楓は首を傾げる。瀬名は不機嫌そうに小さく舌打ちをすると、ちょいちょいと手招きした。

一楓はなんなんだと思いつながら立ち上がり、瀬名の隣に立つ。

すると瀬名は、ぼんぼんと自身の隣を叩いた。隣に座れと言いたいらしい。

「なんでしょうか」

一楓は彼の隣に座って、首を傾げる。

瀬名は突然、ゆらりと体を倒した。そして、一楓の膝の上に頭をのせる。これはいわゆる——膝枕だ。しかもなぜか、一楓の体の方に顔を向けている。

「あ、あの……？」

「きみがうるさいから、疲れた」

タイトスカートに包まれた太股に、瀬名の吐き出す熱い息がかかり、一楓は体を強張らせた。

「ね、寝るなら仮眠室で……」

「きみの膝の上がいい」

瀬名は両手を一楓の腰に回すと、身じろぎをして頭の位置をずらす。その瞬間、一楓の体にぞわりと妙な感覚が走った。

「ひゃんっ」

服越しとはいえ、足の付け根に顔を寄せられ、一楓は思わずおかしな声をあげてしまう。

すると瀬名は涼やかな濃藍色の瞳を向けてきた。

「なに？」

答えることができず、一楓は彼から目をそらして誤魔化そうとする。

「な、なんでも……」

しかし瀬名は誤魔化されてくれない。小さく笑うと、一楓の下腹部に手のひらを押し当てる。

「きみは枕なんだから、動かないでよ」

彼の声はどこか甘い。瀬名はタイトスカートの上から、彼女の下腹部に唇を寄せた。

その瞬間、過去の情事を思い出し、体が火照ってしまう。

「ちよっ」

焦った一楓は瀬名の肩を両手で押すが、彼はびくともしない。それどころか、一楓の腰をぎゅっと抱き寄せ、さらに密着してくる。

「しゃ、社長！ 悪ふざけはよしてください！ そんなところ、だめっ」

一楓が足をもじもじさせながら悲鳴を上げると、瀬名はいたずらっぽく目で意地悪く尋ねた。

「そんなところって？」

「だ、だから……」

「教えて？ どこ？」

睦言のような甘さを秘めた声に、思わず一楓は固まった。

彼の切れ長の目に、妖しげな光が揺れる。それに触発されたように一楓の体の奥が熱くなった。

かつて、彼によって体に刻まれた快樂が、瀬名の動きひとつでよみがえってしまう。

(え、これは、なに？ なにが起こっているの？)

この四年間女つ気がなかった仕事の鬼は、自分に手を出すほど追い詰められているのだろうか。

「教えてよ、一楓」

突然名前を呼ばれ、一楓の心臓が鷲掴みにされたように苦しくなる。

「昔、僕が念入りに可愛がつてあげた部分は、どこ？」

甘い声と共に、瀬名の手が一楓の足を撫で上げた。ぞくぞくとした感覚が全身に走り、一楓は思わず声を上げそうになったが、必死に押し殺す。

「ねえ。いやらしい一楓が、気持ちいいっておねだりしたのは、どこ？」

湿った匂いにする生徒会室で、彼と何度も繋がった思い出がよみがえる。

あの過去について瀬名が口にしないから、これまで全力投球で仕事をできたのだと、今さらながらに気づいた。彼が言っていた『自由』とは、そういうことなのだろう。

それを理解し、一楓は愕然とする。彼とは仕事上のパートナーとして絆を深めてきたと思っていたが、それは思い上がりだったのかもしれない。

彼はずっと一楓のことを、いやらしい女だと内心嘲りながら、共に仕事をしていたのだろうか。

だったら、自分は……まるで道化師だ——

絶望に苛まれ、『やめて』という言葉すら口にできない。そんな一楓を、瀬名は意地悪く追い詰める。

「……僕はしっかりと覚えている。……きみと僕が繋がったことは」

瀬名はうつとりとした顔で、一楓の太股に頬擦りをした。そして破壊力がある上目遣いで彼女を見上げ、甘く微笑む。

「きみの声、きみの顔。きみの体のすみずみを覚えている。ねえ、なかったことにできると思う？僕ときみがただの男と女になって、交わったことを」

一楓に向けられたのは、切なさを孕んだ真摯な眼差し。

しかし一楓には、彼の心情を読み取るうとする余裕すらない。

「きみが忘れたというのなら、思い出させてあげるよ、あの日のこと」

「……やめ、て」

ようやく口にできた拒絶の言葉は、掠れていた。

「やめない。僕だけで満足しない悪い子には、ちゃんと躰をしなきゃ。きみが誰のものなのか、体にもう一度刻まないと駄目みたいだな」

瀬名は体を起こすと、一楓のスカートの中に手を入れる。

「や、やめてっ！」

「やめない！」

強い口調で言い切られ、一楓はたじろいだ。涙がこみ上げてきて、慌てて両手で顔を隠す。

「指がいい？ 口がいい？ ほら、恥ずかしがってないで。ねえ……」

瀬名はそう言いながら、一楓の手を顔から引き剥がし——息を呑んだ。

一楓の両目から、大粒の涙がこぼれていたからだろう。

瀬名がハッとしように一楓から手を離すと、彼女はよつこの思いで声を出す。

「あの日のことは、忘れたいあやまちです。思い出させないでください」

脅しに屈したことを嘲るのはやめて、仕事に励んできたことを見てほしい——そう伝えたくて、言葉を紡いだ。

そして言い終わった瞬間、内線が鳴る。

「仕事に戻ります」

「一楓……っ」

一楓は慌てて立ち上がると、振り向かずに早足で社長室から出た。

第二章 それは、あくまで不可抗力で

社長室での一件から、一日が経った。

一楓は作業場でプログラミングをしながらも、瀬名の前で泣いてしまったことを思い出し、大きなため息をついた。

昨日の帰り際、瀬名は一楓のところまで来て、『ごめん。反省してる』と頭を下げた。一楓が泣いたことが、よほどいたたまれなかったのだろう。

それ以来、瀬名の態度はぎこちない。今までは、一日に何度も社長室に呼び出していたのに、昨日から一度も呼ばれていない。

こちらから行ったら、瀬名は嘘くさい笑顔で、大丈夫だと一楓を追い返した。

仕事について話しても、目を合わせようとしないし、彼はなんだか苦しそうな表情を浮かべる。

そのため、一楓も居心地が悪い。

ぎこちなさの連鎖反応。ふたりの距離が開いたことを、一楓は悟っていた。

過去のことを蒸し返されたのも、彼にいやらしい女だと思われることも嫌だが、仕事に支障が出るのが一番困る。とにかく、やりにくいことこの上ない。

(こんな遠慮がちな関係では、なかったのに)

少なくとも、瀬名は一楓に対して遠慮することはなかったし、一楓も言いたいことを言っていた。元の関係に戻りたいが、向こうが普通になつてくれない限り、こちらだって以前のように接することはできない。

今では、瀬名にされたことよりも、彼といい関係でいられなくなったことの方が憂鬱ゆううつだった。(なんで泣いちちゃったかなあ)

自分の涙を見た時の、瀬名の驚いた表情が頭から離れない。

きつと、彼は疲れていたのだろう。いつもわかりやすく的確に話をするのに、昨日は要領を得ないことを言っていたし、第一、膝枕なんて求めた時点でおかしかったのだ。

「……はあ」

どうすればよかったのだろう。彼を受け入れ、体の関係を持つビジネスパートナーになればいいのか。

しかし一楓は、彼のセフレにだけはなりたくない。簡単に抱ける女として扱われなくなかった。

彼に仕事で必要とされる、有能な自分になりたいだけなのに――

「はあ……」

「ため息ばかりですわね、設楽さん」

突然声をかけられ、一楓はハッと顔を上げた。すると正面に、目の下にクマができた宮部が立っている。

「み、宮部くん！ ごめん、ため息が気になった？」

「違います。用があつて来たんです。しかも、さつき何度も声をかけたんですよ？ でも返事がないから、直接社長に不明点を聞きに行つたんです。そうしたら社長室に入れてくれたのに、あの社長もため息ばかりで、ろくに返事がありませんでした。こんなの、前代未聞ぜんたいみもんの珍事ですよ。痴話喧嘩ちわわなら、プロジェクトが終わつてからにしてください」

申し訳ないと思つて聞いていたが、思わぬところに話が飛んで、一楓は顔をしかめる。

「声をかけてくれたのに気づかなかつたのは申し訳なかつたけど……痴話喧嘩ちわわつてなによ」

「だって、設楽さんと社長、付き合っているんでしょう？ いつもラブラブのくせに。隠しているつもりだったんですか？」

宮部がさらりと落とした爆弾に、一楓は素すつ頓狂どんきやうな声を上げた。

「は、はあ!? 恋人じゃないわ、一体どうしてそんなこと……」

「あれ、じゃあ『まだ』ってことかな。まあいいや、そんな時間の問題だし」

「ちよつと待つて。時間が経つてもそんな関係は……」

「そんなこと思っているの、設楽さんだけです。男はこうと決めたら止まらないものなんですよ」

「あのね、社長もそんなことはまったく思つてないから！」

「だから、そう思っているのは設楽さんだけですつて」

なぜか宮部はきつぱりと言い切り、話を続ける。

「社長つてば、男性が入社すると絶対に言うんですよ。設楽さんにだけは手を出さなつて。牽制けんせいしてる上に、特別扱いですよ」

そんな話は初耳だ。しかし、それは特別というわけではないだろうと、一楓は笑った。

「そりゃあ、わたしが秘書業務をしているからでしょう。社内恋愛で業務に支障が出たら困って……」

「専属秘書を雇えばいいし、社内恋愛でゴタゴタが起きたら困るのは、設楽さん以外でもそうでしょう」

宮部は瀬名と似たようなことを言って、笑った。

「社長をあそこまで追い詰めることができるなんて、設楽さんだけです。でも男って意外とこらえ性がないので、いじめすぎると暴走するかもしれません」

堂々とした彼の言葉に、一楓はなんだか感心する。

「内容はさておき、プログラムしか取り柄がなかった宮部くんが、自信たっぷりなのはすごい」

「……かなり失礼ですけど、こういうことに関しては、設楽さんより場数を踏んでますから！」

宮部は胸を張ってみせる。

「はは、頼もしいね！」

「信じていないなあ？ こう見えても……あ、やべ、ではここで退散します。もしも社長が暴走したら、設楽さんの豊かな胸で、受け止めてあげてくださいね」

彼は突然話を切り上げると、席に戻ってしまった。

用があったのではなかったのかと首を傾げた途端、視線を感じてそちらを見る。すると、瀬名がじつとこちらを見ていた。

一楓と目が合うと、瀬名はふいと顔を背けて出入口に向かって歩き出す。

一楓は同席予定の他社での打ち合わせがあることを思い出して、慌てて瀬名を追いかけた。

（仕事させてもらえなくなつて、自主退職フェイトアウツなんて、してやるものですか！）

こうなつたら意地でも前の関係に戻してやろうと、一楓は意気込む。

仕事は、自分で見つけてすべきものなのだから。



「社長！ 今日頑張つて仕事をとつて来ましょうね！」

瀬名の隣——助手席に乗り込んだ一楓は、いつも通りのセリフを引きつた笑みで言った。車をゆっくり発進させると、瀬名は盛大なため息をつく。

「無理してついでにこなくてもよかったのに」

追いかけてきてくれて嬉しいという気持ちを隠すように、そんなことを言った。

——瀬名は学生の頃から、一楓に想いを寄せている。しかし一度、彼女との距離の詰め方を間違えてしまった。

一楓を部下としてそばに置いて、四年と少し。なんとか彼女と信頼関係を築き上げながら、時期が来るまで手を出さないと決め、我慢してきた。それなのに昨日、嫉妬しつとに駆られて彼女に迫り、泣かせてしまったのだ。

大切にしているつもりだったのに、彼女を悲しませた。そんな自分への戒めとして、しばらく彼女と距離を取ろうと決めたはずが、彼女の言動ひとつで決心がぐらつく。単純な男だと思われたくなくて、虚勢を張るように、また意地の悪いことを言った。

そんな瀬名の言葉を、一楓は否定する。

「無理じゃないです！ わたし、この打ち合わせ、とても楽しみにしていたんです！」

「へえ……」

そこから、長い沈黙が流れた。さすがに狭い車内で、この空気はいたたまれない。

そのまま目的地に着いてしまい、駐車場に停める。渋滞がなかったので、まだ待ち合わせの三十分前で余裕があった。

瀬名は苦悩の末、口を開いたのだが――

「あのさ……」

「あのですね」

一楓と声が重なってしまい、また数秒の沈黙が落ち、妙な譲り合いがはじまった。

「そちらからどうぞ」

「いえいえ、社長からどうぞ」

さらに沈黙が流れた後、瀬名はようやく言葉を口にする。

「無理して喋らなくてもいいよ。最低限の仕事さえこなしてくれば」

仕事熱心で真面目な彼女は、きっと気まずさをこらえながら無理をしてくれているに違いない。

そう思ってしまった言葉だったが、一楓にはまたも伝わらなかったらしい。

「……わたし、お役御免なんですか？」

「は？」

斜め上からの返答に、瀬名は一楓を振り向いた。

すると寝不足の顔で腫れぼったい目をした一楓が、頭を下げる。

「昨日のことなら謝ります。社長は疲れて甘えたいモードだったのに、泣いてしまって申し訳ありませんでした。これからは膝枕の仕事も頑張りますので！」

「いや、あのさ……」

事実が微妙に組み替えられている。これは……自分が一楓に触れた意味さえも、伝わっていないのではないか。

「辛いです」

彼女の切なげな声に、瀬名はハッとす。

「このまま、社長とぎくしゃくするの」

「……っ」

これは、引いてみたのが功を奏したのか。そう期待するが――

「わたし、社長と一緒に、ばりばり働きたいんです！」

やはり、一楓は手強かった。

「仕事か。そうか、うん。仕事ね……」

瀬名は悔しさをこらえて、頭をがしがしと掻く。

乱れた栗毛色の髪を、一楓はさつと手を伸ばして整えてから言う。

「まあ、わたしはプライベートも仕事に侵蝕しんしょくされて、社長と一緒にですから。ある意味、公私ともにという意味になりますが」

その言葉に、瀬名は途端に頬が緩みそうになる。

「きみは、アメとムチを使い分けるのがうまいよね」

「なにがムチでなにがアメかわかりませんが」

「……無自覚か。ふう、天然に負けたよ」

「では、元通りってことで」

笑みをこぼして喜ぶ一楓に、瀬名は顔を歪めた。元通りということは、彼女に異性として意識されない上司のままだ。それは複雑だが、一楓に笑みが戻ったことに安堵する。

どんな苦悩も、一楓の笑顔には敵わず、一瞬で吹き飛んでしまう。

瀬名は、目を閉じて一楓の肩に頭を置いた。すると一楓はビクツと体を揺らす。

「じゃ、社長!?」

「このところよく寝ていないんだ、僕。まあ、自業自得なんだけどさ。きみの泣き顔を見るのは、しんどい。泣かせてしまったと思うと、余計に」

「……っ」

「きみを泣かせて悪かったと思っている。だけど、膝枕の仕事をばりばり頑張るっていうのは、ど

ういうことかわかってる?」

瀬名としては、膝枕をねだったのは仕事ではない。しかし、一楓が膝枕の仕事も頑張るといふのなら、その認識を確かめておかねばならない。

「ど、どうということかって……」

「膝枕の仕事も頑張ると、さっき言っていたじゃないか。大体、きみは僕の枕役を、ぎくしゃくしないのできるの?」

「が、頑張ります」

「……そう。枕はなにをされても——触られても、びくびくしたり、声を上げたりしないんだよ。それ、本当にきみにできるの?」

「で、できますよ、それくらい!」

挑発的に言うと、一楓は意地になって受けて立った。

こんなふうにおかしな仕事を請け負ってしまうのは、本当に心配だ。しかし今の瀬名にとっては好都合である。そんなつもりはなかったが、これからも一楓に膝枕をしてもらおう流れを作れた。

「僕もね、ぎくしゃくするのが辛かったよ。ぎこちなくなりたくないんだ、きみとは。……心から」

一楓の体温を感じ、瀬名の意識はとろとろとまどろんでいく。

「だから僕なりに、この四年……いや、その前から考えていたんだ。どうすればきみが僕を避けず、嫌わず、僕の隣で笑っていてくれるようになるのか。一方的に色々しておいて、なんだけど……」

そこで言葉を切ると、一楓はそつとこちらをうかがってくる。

「社長？」

瀬名はまっすぐに一楓を見た。

「三週間、待つて。三週間後に、創立五年分の決算書を父さんに叩きつけてくる。それが終わった僕は、素直になるから。きみの僕に対する認識を、軌道修正する」

「……軌道修正？」

「そう。ずつと、したくてもできなかったこと。言いたくても言えなかったこと……ちゃんと言うから」

瀬名は一楓の手を取ると、その柔らかな手のひらを自らの頬に当てる。そして、ゆっくりと……指を絡めるようにして手を握った。

「社長!？」

声を上擦らせる一楓。瀬名はふつと笑うと、そのまま静かに目を伏せる。

「いい？ 待つていてくれる？」

「……わかり、ました。だから手を……」

「少しでいいから、このままにさせて。仕事と思つていいから」

「……っ」

「……僕ね、昔からきみの温もりを感じると、心が安らぐんだ」

そしてすうつと寝息を立てた。



——よくわからないけど、社長と仲直りできたらしい。

一楓はほつと胸を撫で下ろし、隣で寝息を立てる瀬名を見る。

初めて間近で見る瀬名の寝顔は、とても美しかった。

『ずつと、したくてもできなかったこと。言いたくても言えなかったこと……ちゃんと言うから』

『きみの僕に対する認識を、軌道修正する』

一体、どんな軌道修正だというのだろう。修正ということは、自分は今、間違つた認識をしているということだ。

「一体、なに？」

彼の頭がのつている肩が熱い。それ以上に、彼と繋いでいる手が熱い。

暴君であり、甘えたがりの瀬名。社長であると同時に、一楓の温もりを求める男。

「……どの顔が、本当のあなたなの？ ……瀬名」

一楓と瀬名が赴いた打ち合わせ場所は、都心に建てられた高層ビルの八階にあった。全国に多くの支店がある、大手流通会社『タキシマコーポレーション』本社の社長室だ。

そのソファに、一楓と瀬名は腰かけている。

「きみのお父様には、いつもお世話になっているよ」

向かいに座った瀧嶋社長は、開口一番、瀧名の父親について口にした。瀧名は涼しい顔で答える。

「父は父、僕は僕ですから」

「いやいや、きみの手腕は、敏腕と名高い総帥譲りだろう」

「ところで、瀧嶋社長。父から、お話があるとうかがったのですが……」

今まで瀧名の父親に紹介された相手に、ろくな輩はいなかった。親の七光りだと口にして、子供扱いする不躰な連中が多い。

それに瀧名がキレてしまわないように、一楓は見張りの役も担っている。

彼女が見守る中、瀧嶋社長は本題に入った。

「じつは、私の息子がいるうちの関連会社に、おたくのアイ、テ、を導入しようと思ってるな」

アイ、テとはITのことだろう。

「それで今日は、息子を呼んだのだ。——健人、入りなさい」

ガチャリとドアノブが回る音がして、ドアが開く。そこから、スーツ姿の爽やかな男性が現れた。社長が笑顔で手招きした男性は、ひと懐っこい笑みを浮かべる。

「久しぶり。瀧名、一楓ちゃん」

それは一楓と瀧名の高校時代の同級生であり、生徒会副会長をしていた、有島健人だった。

有島は、この部屋の主である彼の父親を部屋から追い出すと、日だまりのような笑顔を作った。

一楓は思わずほっこりしてしまう。彼の笑みは、昔と変わらない。

爽やかな美貌の有島は、高校時代、女生徒に人気があった。瀧名が色素の薄い、夢の国の王子様なら、有島は漆黒に包まれた現実世界の王子様だ。

きっと今も女子社員に人気なのだろうと思いつつ、一楓は再会を喜んだ。

「有島くん、すごく久しぶりだね」

「また会えてよかったよ。まさかこんなところで会うとは思っていなかったけれど」

「わたしもびっくり！ 偶然ってすごいね！」

一楓はにこにこ有島に笑いかける。

有島は彼女にとって少し特別な男子だった。それは彼だけが、一楓をあだ名ではなく、名前と呼んでくれたからだ。それに、困っている相手にすつと手を差し伸べることのできる、優しいひとだった。一楓は何度も彼に助けられた。

しかし、一楓にとって有島が特別なのは、それだけが理由ではない。

元々瀧名にしろ有島にしろ、イケメンというものは自分とは違う世界の存在。言わば物語の主役のような存在だ。その有島に、一楓はかつてときめきを抱いていた。

とはいえ、それは恋ではない。なぜなら、彼が男性と話しているところを見ると、その感情が生じたからだ。つまり妄想の対象として……腐った意味で、彼は特別だったのである。

BLに夢中だった時期に、男慣れしていない自分に声をかけてくれるイケメン。それは一楓の中で、読書中のBLマンガのキャラに自動変換された。

楽しんで同級生と話す有島の顔を盗み見ては、彼が受けか攻めか考えたり、妄想を膨らまして、にやにやしていたのだ。

BLマンガを拾った瀬名に口止めたのは、一楓が腐女子だとバレたら、有島に気味悪がられてしまうかもしれないと思ったから。尊い推しに疎まれては、立ち直れなかっただろう。

しかしそれは過去のこと。BLを封印した今、有島と再会しても、懐かしい気持ちになるばかりだ。BL思考が復活することもなく、『高校時代はお世話になりました』と心で頭を下げるのみである。

そんな彼女に、有島は笑みを向けてくる。

「ねえ、金曜日の同窓会、今度こそ一楓ちゃん、来られる？」

「あ……ごめんね、無理だわ。ありがたいことに仕事が忙しくて、せ……社長も」

一楓はぎこちなく答えた。なぜならば、瀬名から痛いくらいの視線を感じたからだ。

（せ、瀬名と有島くんは、友達でしょう？ なんて再会を喜ばないの？ このひと。男の友情ってこういうもの？ 照れ隠し……でもなさそうよね）

もしかして喧嘩でもしたのだろうか。

そんなことを考えていると、有島が心底残念そうに言う。

「そっか、残念だね。それより一楓ちゃん、瀬名のことを『社長』って呼んでいるんだ？」

「尊敬する上司で、我が社の社長だもの！」

「あはは、迷いがいいね。……ねえ、一楓ちゃん。俺が独立したら、うちで働かない？」

冗談めかした有島の言葉に、一楓が返事をしようとした瞬間――

「駄目に決まっているだろう！」

不機嫌極まりない様子で、瀬名が声を荒らげた。そこに含まれる明らかな敵意に、有島は肩を竦めておどける。

「いやだなあ。冗談に決まってるだろう、瀬名。そんな目くじらを立てるなって。なあ、一楓ちゃん」

「そうですよ、社長。どうしたんですか？ 昔は社長と有島くん、仲良かったじゃないですか」

「生徒会で一緒だったから仕方がなくだ。馴れ合っていた覚えはない」

「はいはい。外面がいい奴はこれだから」

瀬名にそんな口をきける同級生は貴重だった。やっぱり仲がいいんじゃないかと思いつながら、一楓は話題を変えた。

「そういえば、有島くんが瀧嶋社長の息子さんだって、知らなかったわ」

ただの世間話のつもりだったが、口に出してから一楓はハツとした。名字が違うということは、なにか複雑な事情があるのかもしれない。デリカシーがないことを言ってしまっただろうか――

そんな焦りが顔に出たのか、有島は一楓を安心させるように笑う。

「俺は母親姓を名乗っているし、あまり知られてないだろうな。俺、愛人の子供だから。意地でも瀧嶋を名乗りたくないんだ」

やはり飛び出したデリケートな話に、一楓は申し訳なくなる。

「ご、ごめんささい」

「いいんだ。もう開き直ったから。父親には母子で苦勞させられて、昔はただただ恨んでいたんだけれど、社会人になったら考え方が変わったんだ。使えるものは使って、成り上がってやろうかなって。コネだけはあるからさ」

その口調は、野心を語っているとは思えないほど爽やかだ。冗談なのか本気なのか、一楓にはよくわからなかった。

「……つまり、お前は父親を利用して、僕を呼び出したわけか」

瀬名は忌々しげに有島を睨む。その言葉に、有島は素直に頷いた。

「ああ。だって俺が呼び出しても、瀬名は絶対会おうとしないだろう」

「……岩本から聞いたのか」

「さあ、どうだろうな」

有島は妙に楽しげにはぐらかした。瀬名は舌打ちをすると、ぼやく。

「だから、いやだったんだ。あいつにばれるのは……」

「今週末の同窓会、ふたりで少しでもいいから出るよ。ガンちゃん、張り切ってたぞ？」

有島の誘いを、瀬名が冷笑で拒絶する。

「出るわけじゃないか。お前たちと違って、僕たちは忙しい」

「ふうん？ 俺は楽しみにしていたんだけどなあ、一楓ちゃんと酒飲むの」

「ひとの部下を口説かなくてくれるかな。彼女は、お前のものじゃない」

「でも瀬名のものでないよな。彼女が自分の意思で、俺のところに来るかもしれないじゃないか」

瀬名と有島の間に、火花がバチバチと散っている——ような気がする。

（わたしはなにも言っていないのに、『もしも』の話でどうして敵意を剥き出しにしているんだろう、このふたり）

一楓は呆れてしまう。

「話がそれだけなら僕はもう帰る。設楽、帰ろう」

立ち上がって一楓の腕を掴んだ瀬名に、有島は座ったまま言う。

「ちょっと待て、瀬名。仕事の話が本題だ。まあ、座れよ」

「……お前からの仕事を引き受ける気はない」

「いや、瀬名にもメリットがある。——というか、共同戦線を張らないか？」

「共同戦線？」

瀬名は訝しげに目を細めた。

「無理無理！ なんで有島くんの提案に乗ったんですか、社長！」

車に戻るなり、一楓は悲鳴を上げる。

「試験的でもいい、かつ基礎となるベータ版は開発済みとはいえ！ 誰もがあっと驚く機能がついた新OSを開発するって、どれだけのことだと思ってるんですか！ その期限が今週末っていうだけ